

抗日パルチザン参加者たちの回想記読書会

Vol.14
第2期第4回



함께=共に

一九二二年の夏、新潟県下の信越電力発電工事現場で、日本の請負業の親方が、二、三の朝鮮人土工を残忍なやり方で虐待して殺し、それを川の中に投げこんだ。これに対し朝鮮人学生団体が激しい抗議運動を起こし、日本人も協力して、東京で日・朝共同の抗議集会がもたれました。——『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』

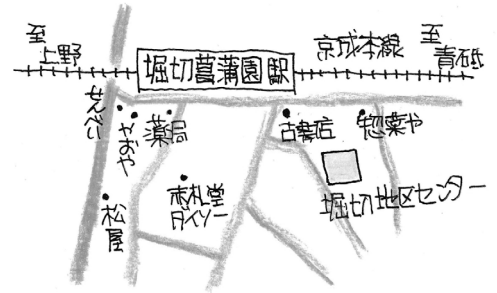
日本人の側で、りっぱに日朝中の共同の反帝反日の闘いの立場を確立した人間があった……その気持ちは、「雨の降る品川駅」という中野重治の詩の中にもうたわれているとおりです。——『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』

●テキスト 中津川事件 張明秀『中津川水力発電所における朝鮮人労働者虐待・虐殺事件——「東亜日報」掲載の資料紹介——』（出典『新潟近代史研究』第3号、新潟近代史研究会、1982年10月、66 - 115頁）

雨の降る品川駅 中野重治の詩「雨の降る品川駅」（『改造』1929年2月初出、『中野重治詩集』岩波文庫、新潮文庫ほか所収）、大西巨人の批評「コンプレックス脱却の当為」（『みずす』1997年3月15日、4月15日初出、『日本人論争 大西巨人回想』2014年左右社所収、『解纜ブックレット 大西巨人 コンプレックス脱却の当為』2022年二松学舎大学山口直孝研究室）

日 時 2026年 **10月25日** 場所 **葛飾区立堀切地区センター 小会議室**
(日曜) 午後1時15分～5時 京成本線「堀切菖蒲園」駅徒歩約4分、葛飾区堀切3丁目8-5

13:15～14:45 報告「中津川事件」岡崎耕史（福祉労働者）
討議
15:00～16:30 報告「中野重治「雨の降る品川駅」をめぐって」田代ゆき（新聞労働者）
討議



参加費 ひとり **500円**（要予約）

主催（予約） 前田年昭 メール tmaeda1966516@gmail.com 電話 080 - 5075 - 6869

○参加ご希望の方は事前にお申込みください（電話・メール）。

○テキスト入手についてはご連絡ください。事前に対象テキストを読み、当日もテキスト持参のうえでご参加ください。

前回に続いて、『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』第二講を掘り下げ、日・朝・中三国の連帯の歴史を具体的に学びたいと企画しました。

中津川事件は、1922年、新潟県中津川の水力発電所建設現場で、朝鮮人労働者が過酷な労働と暴力的な労務管理のもとで虐待・虐殺された事件です。植民地支配のもと日本へ渡り、最も危険で過酷な労働を担わされた朝鮮人労働者。その犠牲が報道され、朝鮮人自身による真相究明と抗議、抵抗の運動が広がりました。

中津川事件と関東大震災時の虐殺は、どのようにつながっていたのか。民族差別を利用した暴力的な労働支配は、日本資本主義の発展をどう支え、そこ

に生まれた労働者の抵抗は何をもたらしたのか。中津川事件を起点に、労働現場の暴力と震災時の市民による虐殺を、一体の歴史として考えます。

『日・朝・中三国人民連帯の歴史と理論』に、日朝共同の思想、共通の感情にたって作られた作品として引用された中野重治「雨の降る品川駅」は、プロレタリア国際主義をうたった希少な詩として読み継がれる一方、とりわけ「日本プロレタリアートのうしろ盾まえ盾」という表現をめぐり批判の対象ともなってきました。批判は何を根拠として生まれ、反批判はどのような立場に立ってなされたか、確認した上で、いまこの詩をどう読もうとするか、率直に議論したいと思います。

『翻訳と連帯 ある寄せ場労働者の「抗日パルチザン参加者たちの回想記」翻訳の軌跡』

編訳・鈴木武、発行・同志社コリア研究センター、2023年3月、A5判328ページ

本書は『回想記』全264話から精選した28話で、電子版が発行元の同志社コリア研究センターのウェブサイト <https://do-cks.net/works/publication/korea05/> で読めます。

侵略の尖兵が民族解放闘争に包まれるということ

キム・ヨニル

『反戦兵士物語』を通して掴もうとしたのは、日・朝・中三国人民連帯が歴史的にどのように闘われたのか、特に日本人にとっては「自国」の帝国主義をどう撃つのかということが課題であった。

帝国主義本国の被抑圧者・労働者階級は、植民地においては植民者として侵略の尖兵を担われる。その皇軍兵士が、捕虜という経験を契機として、被植民地人民の民族解放闘争に包まれることで日本帝国主義を総括し、「祖国」の同胞に銃口を向けた。とはいえ、内面にこびりついた日本帝国主義を洗い流すには、手厚い処遇だけでなく自己変革の意思がなければ成し得なかった。その意味で、八路军の農民の生まれ変わった姿は「お手本」であった。

また、日本労農学校での任務はもっぱら「学習」であったが、民族解放闘争を物質的に支える生産運動を免除されていたのは、彼らの主体の発展段階で必要とされているのは労働ではなく学習であったからだ。

秋山良照「西瓜（スイカ）」と焼餅（シヤオピン）」と中小路静夫「延安の生活」はその様子を生き生きと描いた手記である。私は思ったが、参加者からは主体の変革を描いたには筆致に屈託がないという指摘もあった。確かに政治的目的をもって書かれ編纂された文書ではある。しかし私には、単なるプロパガンダ文書とはいえない皇軍兵士／反戦兵士

の実存が確かに刻まれているように思えるのだ。

最後になるが、野坂参三について。野坂は、44年の延安米軍視察で

侵略加害の自覚から共通の敵に対する闘いへ

前田昭

報告で私は、1969年3月31日の大村収容所解体闘争デモのルポルタージュを読みあげた。ベ平連小田実ら57人によるこのデモは、日本の侵略と加害の歴史の自覚から進んで、米日韓反共軍事同盟とその結節点・大村収容所に標的にした闘いだった。

日本は敗戦したにもかかわらず、朝鮮人を「みなし外国人」として支配管理下においた。国境を超える生活圏を生きる人民は、自由に帰還、往來の日常を送っていたが、権力は、玄界灘に引いた線を超えた者を「密入国」として隔離追放する出入国管理体制を築き、その収容施設として大村収容所を朝鮮戦争さなか

対日宣伝工作について述べたが、視察をまとめた「延安リポート」は対日ドクトリンに強い影響を与えた。

この野坂の天皇観の転回は、日本共産党の右往左往にとどまらず、占領軍政策から始まる戦後日本の天皇制をも強く規定していると思わざるを得ない。

の1950年暮れに作った。

運動は、加害の自覚にとどまらず、米主導の日韓条約は日本軍国主義復活の第一歩であり、米日韓反共軍事同盟こそが人民の共通の敵であることを見いだす。線を玄界灘ではなく、米日韓権力者と日・朝・中人民との間に引き直したのである。

大村収容所は「戦後民主主義」のタテマエすら投げ捨てた法外のアウシュビッツであり、収容された朝鮮人民は20年間で約100回以上の抵抗（集団ハンスト、要求騒擾、屋上占拠、脱走、自決など）を闘っていた。大村解体闘争はこの抵抗闘争に呼応し、入管闘争の先駆となる闘いだったのである。

われわれを解放する梃子を求めて

須田光昭

帝国主義とは自国の労働者階級を共犯者に仕立てあげていく体制だ。逆に言えば、われわれが共犯者の立場を自覚的にやめる瞬間、帝国は存続しえないだろう。

たちが支配しているアイルランドに据えなければならないと主張したが、まさに反戦兵士が身を翻した梃子は中国人民に据えられた。

万国の労働者の団結を目指したレーニンが抑圧民族と被抑圧民族を区別せよと強調した意味を考えたい。人間を分かち一切の線をなくすことを究極目標とする共産主義運動は、だからこそ闘いの過程では線を強く意識する必要がある。そうでなければ帝国のエゴイズムにどっぷり浸かった重石を動かす梃子をどこに据えるのか。

『金東希とわれわれ』の著者が、ベトナム戦争の韓国軍脱走兵を殺そうとしているのはだれかと執拗なほど日本の労働者を揺り動かそうとした必死の筆致も、われわれの梃子を求めた軌跡として継いでいきたい。

よき人に出会えるかどうか

赤羽健

「皇軍兵士が生まれ変わることは容易ではなかった。ただ優待されるだけでは、思想の変化は訪れない。自らの意思で変わろうとするしかない。それを支えることができるのは、先行して生まれ変わった人々だ」（キム・ヨニル氏報告より）。よき

先達や友人に出会えるかどうかは、生まれ変わるかどうかの問題に限らず、人間が生きていくうえで最も重要で普遍的なことだと信じる。「自己の一貫性」を崩すのはつねに、外から訪れる静かな言葉や行動だと思うからである。本の性質上致し方ないことだが、文末に党への謝辞が書

かれている点がどうしても気になってしまふ。党というものの、主義（イズム）というものを自分は信じていないから些末事に引っかかった。物語以上に最も興味深いと感じたのは、野坂参三の存在である。野坂が米軍に助言したという「延安リポート」、野坂の天皇観に関してなどは初めて知り、今後調べていきたい。

天皇の赤子が労働者となるために

田代ゆき

『反戦兵士物語』のなかで、八路军兵士が日本兵を指して言った「彼もわれわれとおなじ労働者であって」という言葉に「日本人は君臣一体」との想念が対置されたとき、天皇制は労働者階級の敵であるという自明の理を新しく思い知る気がした。

「彼もわれわれもおなじように日本軍閥の被害者であ」るからと言って、加害の歴史が帳消しになるわけでない。帳消しどころか「天皇の赤子」として中国人民を惨殺した記憶は、敵と手を結び同じ釜の飯を食う仲間を裏切ったことへの悔いとして、省みられねば済まない。八路军の一員となって出会う中国農民が日本兵のときと「まったく違って見えた」という、その目を手に入れるために、その足場から加害を迫及することに、私もまた自身の労働と勉強の中に努力したいと思う。

1967年の金東希救援運動が、彼とわれとの間に二度と線を引かぬよう、二度と仲間を裏切らぬよう、日韓条約に抗い闘われた事実を知って力を得た。